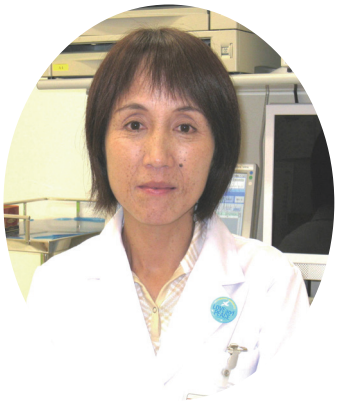
核兵器廃絶をめざす
富山医師・医学者の会
No. 52
会報

富山市桜橋通り 6-13
TEL　076-442-8000
世話人代表　金井英子

広島・長崎ヒバクシャ証言集「想い」

すべての人の心に想いを込めて、県被爆者協議会が発刊



ぜひ待合室に置いていただけますように

核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会
世話人代表
富山県被爆者協議会　副会長
金井　英子

原子爆弾投下から 75 年が経過しようとする今夏、富山県被爆者協議会は「ヒバクシャ証言集」を作成しました。

被爆者協議会は 30 年前と 25 年前に「叫び」と題する被爆証言集を作成しました。37 名のヒバクシャが苦しい被爆体験を身を削るように語ったものです。その後、新たな方々から被爆証言を頂く事が出来ましたので、それらをまとめて 1 冊にし、題名も「想い」に変えました。

「叫び」から「想い」に

「叫び」から「想い」に変更した理由は、75 年経過した今、「叫ぶ」よりは、静かな語り口の方が全ての読み手の心に永遠に留めて頂けるだろうと考えたからです。そして「想い」は「重い」でもあります。また、被爆者協議会の小島貴雄会長は読みにくい漢字、分かりにくい文脈などは、後世の方が読みやすいように書き換えました。国語教師としての経験が活きました。富山県内の全小学校、中学校、高等学校、各自治体の首長、図書館に贈呈しました。

また、核兵器廃絶という同じ志をもつ当会にも贈

今年は恒例の夏のイベントはありません

県内ではコロナ新規感染はほぼ落ち着きを見せており、県の対策指針におけるイベント開催制限は徐々に緩和されてきています。

しかし当会のイベントは「市民公開（一般向け）」「高齢の方も多く参加される」「医療従事者の参加も多い」「上映中は会場を閉め切る」など、感染対策を行ってもなおリスクの高い企画であることは否めないことから、今年の夏のイベントは開催しないことを決定しました。

当会としましては、当面、ヒバクシャ証言集の普及、時勢に即した取り組み（これまでのイベント動画の web 公開など）を検討しています。

呈頂きました。

当会でお話しされた方々も

証言集を執筆あるいは編集なさった、柴田政一、田島正雄、岸川義一、飯田國彦、水野耕子（故人）、田中春子（故人）、太田安子さんらは当会でも被爆証言を話して頂きました。水野さんと田中さんは亡くなられ、太田安子さんはお体が弱られ、岸川さんは耳が遠くなられました。田島さんもご病気がちです。ヒバクシャの方が指数関数的に減っていかれ、今、県内で被爆証言できる被爆１世は多分おられません。原爆被害の実相を後世に残すことが被爆２世３世に突き付けられた「重い」課題です。

ぜひ待合室に置いてください

この証言集を読まれた方が、原爆の被害がいかに筆舌に尽くしがたい酷いものであったかを実感され、全ヒバクシャの願いである「核兵器の廃絶と真の世界平和の大切さ」をご理解頂きたいと思います。この証言集を病院や医院の待合室などに置いて頂き、来院された方が手に取ってご覧になれるような配慮をいただければ大変嬉しいです。

証言集「想い」から

柴田政一さん（広島）
昭和 20 年 6 月特別攻撃隊員として佐賀県に配属、8 月 5 日に広島・江田島幸の浦に。翌 6 日に原爆投下。

（柴田さん）

…満員電車は焼け鉄の骨框の中に、半焼けの死体を乗せ、運転台に寄り掛かった裸体の女性は、5月まで休暇で市内を散策した時に手を振ってくれた女子挺身隊の彼女達でした。何たる無常な姿、必勝の鉢巻き姿は無残でした。爆心地に近づくに従い、死体の処理が急がれていたようです。担架に乗せようと頭と足を持つが、持ち上げようとすると肉がズルズルと裂けて困っている姿！

死体の集積地（河原）では、我が子、兄弟、親を求める狂気の肉親、狂いに狂った地獄を見た私は、広島だけは二度と見たくもないし語ることもないと心に誓ったものでした…

田島正雄さん（広島）
17 歳で入隊、広島・江田島の四五戦隊でベニヤ板製特攻ボートの訓練中に原爆投下。翌日から広島入市。

（田島さん）

爆心地に近づけば辺り一面は焦土と化し、地面は熱く焼け進入出来ない有様。道路には無数の死傷者。露出した体は焼けただれ、皮がむけ肉がむき出している。手足を持てば「ズルズル」と皮膚がすべりむける。私達は手袋もなく素手で作業を行った。

最もひどいのは、黒く焼けこげ手足がとれて男女の区別もつかない。体に触れれば生々しい内臓が「ダラダラー」と焼土へ垂れさがる。これを見ながら休む暇もなく死体の運搬、夜は死体と共に野営であった…

（岸川さん）

…原爆投下後、3日目に焼け野原となった広島市へ。我々、楠部隊（軍通信任務）が和歌山県笠田町より、当時国鉄の無蓋貨車に乗って広島駅に到着した。

待合室は怪我人で溢れ、近くの元安川には人の死体が無数に浮かび、路端には多数の死体が目を覆うばかりに横たわっていた。

岸川義一さん（広島）
無線通信手として和歌山楠部隊に配属中命令を受け、原爆投下３日後の８月９日に広島入市。

我々は生き地獄の中を通り抜け、目的地の広島中央電信電話局にやっと到着した。宿舎である建物の地下室、屋上には柱に寄りそったままの姿で遺体となった人々の多いのに驚いた。まだあどけなさの残った学徒動員の生徒達が含まれていたのであろうか？付近の学校には遺体や怪我人が所狭しと並び、我々の目前で何人も死んでいった…

ー３ページに続くー

ー2ページからの続きー

（飯田さん）

…そこで母と姉は、余りに若い命を亡くしました。母は、一日早く亡くなった我が娘の死を知らないまま、「間基子！」「間基子！」と名前を呼びながら亡くなりました。母28歳、姉5歳の若さでした。私も瀕死の状態で食欲もなく死を待つばかりでした。

祖父母が、母と姉の葬儀を葬儀屋に依頼したところ、「この坊ちゃんも間もなく死にそうだから、一緒にまとめて葬儀をしましょう」と言ったそうです。

左腕にガラス片が刺さった傷は深く、数年間ガラスの欠片や膿が出続けました。原爆で多くの人々が、傷口からウジが涌いたような状態で亡くなったことを知る家族に心配をかけました。目ヤニも止まらず、眼が全て無くなるのではないかと皆が心配しました…

飯田國彦さん（広島）
爆心地約 900m の祖父宅で 3 歳で被爆。母と姉が相次いで逝き父親はすでに戦死、戦災孤児となる。

（太田さん）

…家の下敷きからやっと助け出されたのは、それからどれ程後だったかわからない。私は不死鳥のようにしっかり立ち上った。

「あれェ、工場がない」真っ黒に焼け焦げた鉄骨だけが曲がりくねりながら建っている。その間からずっと遠くの景色が見える。

太田安子さん（長崎）
その日の朝、友達と歩いているとB29 が。危険を感じ空き家に飛び込んだ瞬間、青白い光を感じた。

「おじさんありがとう。」ふと見るとその人の顔から血が吹き出ている。鼻が無い？「あんた達は若い、私を置いて逃げなさい」一瞬その人が仏様に見え、「ありがとう」もそこそこに私達は山を目指して逃げる。途中壊れた家々の下敷きになった人の助けを求める叫び声が聞こえる。一瞬立ち止まるが、次の瞬間友と一緒に唯黙々とひたすら山に向かって逃げる…

（水野さん）

…私は爆心地より二・八キロの学校工場で被爆致しました。当時14才でした。原爆が投下されて地上二千㍍の上空でピカ！と全市に閃光が拡がり、次の爆破は地上で起きました。二階の教室で異常な光を浴びるなり、友の手を取り階段を駆け下りようとしました。友の一人が「アッ、防空頭巾！」と言うなり、手をもぎ放して駆け上がって行きました。私はもう一人の友と12段の階段を踊り場まで駆け下りた瞬間、二人は凄い振動で壁に打ちつけられ気を失いかけていました。

一瞬後見たものは、壁の姿見の鏡が頭上より落ちコナゴナに割れ、辺りは白いホコリと煙の様なものが漂っている状景でした。

上に戻って友の所へ行くと、足の裏をガラスの破片で動脈を切断し、顎にガラスが突き刺さって大出血をしていました。光によって小さく割れた破片が人々の身体に刺さり、多くの友は傷を負い出血して医務室の方へ走っていきます。幸い無傷だった私は、部屋のガラスが滅茶苦茶に散乱したベットを先生と引っ繰り返して重傷者を寝かせました…

水野耕子さん（右）と田中春子さん（左）
二人とも長崎で被爆。田中さんは長崎三菱兵器工場で勤務中、水野さんは女学校で製図の仕事の待機中だった。

（田中さん）

…46年経った現在も私は甲状腺の病気に悩まされ、心臓発作を繰り返しとうとう乳癌になって手術をしました。

診療して下さるお医者さんは皆一様に「貴女が生きていることは奇跡に近い」と言われます。結婚して流産ばかりの繰り返しでした。子供がやっと宿った途端主人から「原爆を受けた身体だから不安だ。処置してくれ」と何度も言われましたが、私はやっと授かった我が子だから生みたい一心で頑張り通し男児を産み、今は25才の元気な青年に成長しました。小学低学年の頃鼻血を良く出して心配しましたが、それも治り、中、高校はマラソンの選手として活躍しました。現在社会人として逞しく生きています。

46年間誰にも話したくない、あの悲惨な光景。苦しみもだえて死んで行った人々を忍ぶ時、涙が出て胸が一杯になります…

核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

第 16 回 定期総会 のご案内

日時　2020 年 8 月 12 日（水）19:30 ~ 21:00

会場　富山電気ビルデイング　4 階　7 号室

－ 予定議題 －

- **この間の活動報告と次期活動方針案**
- **18 ~ 19 年度決算と 20 ~ 21 年度予算案**
- **世話人会改選案　等**

2019 年 8 月「映画と被爆者の講演のつどい」
（今年はつどいの開催はありません）

≪新型コロナウイルス感染症の感染防止に関わるお知らせ≫

定期総会にご出席の会員の先生方は、マスク着用などご自身及び周囲への感染予防の配慮をお願いいたします。

今後の状況によって本総会の開催・運営に関して大きな変化が生じる場合は、申し込みされた先生にご案内差し上げます。

当会ウェブサイトでもお知らせいたします。内容を随時更新いたしますので、ご来場前に必ずご確認いただきますようお願い申し上げます。

当会ウェブサイト　http://toyama-hok.com/hankakuishi

会費納入のお願い

私たちの会の活動は、会費によって支えられています。活動の基盤となる財政を確保するため、今年度会費の納入をお願いします。

また、まだ入会されておられず、会の趣旨に賛同し入会を了承される先生は、ＦＡＸまたは電話でその旨ご連絡ください。会費納入用の郵便振替用紙をお送りします。

◇年会費　　５,０００円（毎年７月が期首）
◇振込方法　郵便振替

会員の先生に 2020 年度分（2020.7 ~ 2021.6）の会費請求書（郵便振替用紙）を同封しています

編集後記

●当会の被爆体験を聞く会で、これまで７人の方にお話しいただいた。その中で水野耕子さんと田中春子さんは長崎で被爆した幼なじみ。ともに縁あって遠い富山で出会ったときは互いに涙したという。

●水野さんは負けん気が強く、被爆者協議会のお世話をずっと続けてきた。「ABC の非人道性が許せないの。被爆者の調査は熱心なくせに治療は一切しない。その怒りが私の原点よ」と話してくれた。

●一方、田中さんはおとなしい性格で富山ではずっと胸の中に押しとどめてきた。３ページの写真は当会で被爆体験を話しているとき、嗚咽が止まらなくなった田中さんに水野さんが駆け寄って「あんた今話さなかったら後悔するよ」とハッパをかけた場面だった。お二人にはもう会えない。（S・M）